

メルロ＝ポンティの知覚における運動性  
ーその重要性と現在における意味

柿沼美穂（東京工芸大学）

メルロ＝ポンティの知覚論は、人間の知覚に知覚能力ばかりでなく運動能力も働いているとするところに特徴がある。視覚をはじめとする知覚能力（いわゆる五感）は、特にデカルト以降、科学と哲学の両面から議論されるようになるが、「運動」を考慮に入れるものは少数派である。知覚論は、その基盤を「身体」に置くが、注目されるのは知覚器官の機能や、それらと脳をはじめとする身体の各部分の連係がほとんどであり、そこに運動や運動能力がかかると考えるものは少ない。なぜメルロ＝ポンティは、知覚に運動能力が必須と考えたのだろうか。

しばしば指摘されるのは、メルロ＝ポンティの知覚論が、フッサール後期の知覚論を引き継いでおり、彼の受動的総合やキネステーゼの流れを汲んでいるということである。デカルト以降、人間の認識の仕組みに関する議論が盛んとなり、感覚器官から得られたデータが、理性や悟性といった精神的な働きによってまとめ上げられて成立すると考えられるようになる。しかしフッサールは、日常的な知覚を詳細に吟味することにより、人間の直接的な知覚には、超感性的な範疇的直観や本質直観のような働きまで備わっているという結論に至る。

目の前にある「もの」（たとえば机など）を見る時、われわれは固定されたある一点からそれを見るわけではない。おそらくその周りを歩いたり、視点を上下に動かしたりする。そのとき、部屋の電気が突然消えて暗くなり、机が見えにくくなることもあるかもしれない。しかし、われわれはさまざまな視点から得たその机の像が、そこにある、ある一つの机のものと把握し、同時に、その机が「本当にそこにある」こと、その机のリアリティともいうべきことも捉えている。こうしたことは、たとえばデカルトの視覚論においては説明がつかない。デカルトはそれらが当然のように、つまり予め理性によって措定されているかのように与えられると考えているように思われる。しかし理性が同一性やリアリティを措定することは不可能なはずである。

後期のフッサールは、直接的な知覚における対象の同一性やリアリティといった、それまでの認識論では説明が困難なことがらに関する考察を深め、やがてそれらが、身体の運動感覚（キネステーゼ）による内的時間意識によって与えられると考えるようになる。身体は過去把持と未来予持という時間の厚みをもつ現在を生きており、その

ような身体による知覚が、ものの同一性やリアリティを伴うとしたのである。

たしかに、メルロ＝ポンティは、フッサールのこのような考え方を受け継ぎ、運動が知覚に関係すると考えている。ただしフッサールが、このような時間的な厚みを含む身体の運動感覚の働きを、われわれに提示される表象の中に読み込もうとしたのに対し、メルロ＝ポンティは、この運動を、通常理解されるような場所の移動、あるいは、実際の知覚表象に現れる運動感覚とは異なるものと考えている。メルロ＝ポンティによれば、この運動は、運動している私には「見えない」ものである。それは、場所の移動のような客観的な運動ではなく、したがって、知覚表象として把握されることはないものだからである。しかし、この運動がなければ、われわれの身体が知覚による表象を得ることはできないと彼は述べる。

メルロ＝ポンティは、この運動が、われわれが何かを知覚するとき、その対象に接近する、あるいは焦点を定めるそのときには、すでに発動されているような、無意識的な運動であると考えている。そして、この運動によってはじめて、われわれは「外の」世界に到達できる。この運動は私が対象にかかわるしかたの一つのあり、表象の提示にかかわる感覚とともに働くもの、そして、私の知覚を成り立たせるために必須のものである。さらに、この運動は、通常客観的に把握しうる運動とは異なり、1回で完結するようなものではなく、常に次の運動を孕むとされる。われわれは対象に合わせて知覚を絶えず調整するが、それはこの運動のダイナミズムがあつてこそ可能となる。バルバラスは、これを「常にすでに実現されているおり、これからもさらに実現される余地を残している運動的な志向性」と捉えている。

このような運動は幻想ではない。彼自身が例として挙げているように、われわれの目は、対象を捉えるとき、無意識のうちに最適のしかたで動き、調整を行う。また手は、触れている面の様相を把握するのに最適なスピードと触り方を常に整える。身体は知覚しようとする対象について、すでに知っているかのような対応をするのである。さらに、近年の神経生理学的な研究によれば、本人が「見えない」状態にあつても、目の前の障害物を、まるで見えるかのように避けることができる人が存在する。

そして、このような、自らを超え出て対象に向かう運動は、われわれの知覚能力に何らかのしかたで影響を与え、知覚される世界の豊かさ、繊細さに深く関係すると考えられる。人間の経験や知見が AI による知見と比較される現在、このような人間の知覚に関する考察は大きな意味をもつのではないかと思われる。